

## 法義の根本

### 第一章 阿弥陀仏の本願

#### 第一節 真実の願と方便の願

淨土真宗の法義の根本は阿弥陀仏の第十八願にある。ゆえに、親鸞聖人は『教行信証』の「信文類」において「この大願を選択本願と名づく」（一二）と示され、「御消息」には「選択本願は淨土真宗なり」（七三七）と述べられている。

因本の願  
本願とは、もともと因本の誓願という意味で、菩薩が仏になるためにおこす願である。これには薬師如來の十二願、釈迦如來の五百願等があり、阿彌陀如來は四十八願をおこしている。この四十八願は、大きく分けて、（一）攝法身の願（自分の理想とする仏身に関する願い）、（二）攝淨土の願（自分の理想とする淨土に関する願い）、（三）攝衆生の願（衆生を救済する

ことに関する願い)の三つに分けられ、攝衆生の願の中、衆生が淨土に往生する因について誓われてあるのは、第十八・第十九・第二十の三願である。親鸞聖人は、このうち第十八願を真実の願、第十九・第二十願を方便の願とみられた。第十八願は他力念仏によつて阿弥陀仏の淨土に往生せしめんとする願であり、第十九・第二十願はそれぞれ、自力諸行の行者、自力念佛の行者を往生せしめんとする願である。親鸞聖人は、第十八願が阿弥陀仏の本意であつて、第十九・第二十願は本意ではなく、他力の教えを直ちに信じられない未熟な人々に対して、仮にしばらく淨土往生の教えに誘い引き入れるためのものであると見られている。すなわち、このような方便の願は、暫く用いて還つて廃せられるものである。また、この第十九・第二十願による往生は化土往生であつて、第十八願による真実報土への往生とは異なると見られている。

親鸞聖人は、この三願について、第十九願より第二十願へ、第二十願より三願転入

真美報土 阿弥陀仏  
の本願にむくいた眞実の淨土。行者の自力の心に応じてかりに設けられた方便化土に対する言葉。

り第十八願へといふ、いわゆる三願転入の表白をされてゐる(「化身土文類」四一二)。これを、聖人の実際の体验とみるか否かについては異論のあるところであるが、たゞこれを聖人の求道の過程と見ても、まず第十九願より入れといふ意味ではなく、第十九・第二十願は捨て去られるべきものであり、第十八願のみに依れといふ意味とるべきである。また、第十八願の中に身をおいてみると、ずっと以前より阿弥陀仏の大悲の中にあつたという感謝の念をあらわされたものと見るべきであろう。

第十八願は、衆生救済のためにとくに選びとられた根本の誓願であるといふ意味で選択本願といわれる。この第十八願の文は、  
設我得佛、十方衆生、至心信樂、欲生我国、乃至十念、若不生者、不取正覺、唯除五逆、誹謗正法。

たとひわれ佛を得たらんに、十方の衆生、至心信樂して、わが国に生ぜんと欲ひて、乃至十念せん。もし生ぜずは、正覺を取らじ。ただ五

逆と誹謗正法とをば除く。(一八)

(もし、わたしが仏になるとき、あらゆる人々が心から(至心)信じ

喜び(信楽、往生安堵の想)より(欲生)、少なくとも十声念佛し

て(乃至十念)、そしてわたしの国に生れることができぬようなら、

わたしは決してさとりを開きません。ただ、五逆の罪を犯したり、

正法を誹つたりするものだけは除かれます)

というのである。ここでは、信(至心・信楽・欲生)と行(念佛)とが誓われてあって、法然聖人はこの第十八願を「念佛往生の願」といわれる。

親鸞聖人もそれを承けて「念佛往生の願」(二二)といわれるが、「信文類」の標榜には「至心信楽の願」(二二〇)と掲げられている。「念佛往生の願」というのは諸行の法に対して第十八願の法を念佛の行で示されるのであり、「至心信樂の願」というのは第十九願(諸行・往生の法)第二十願(自力念佛の法)に対して他力の信心を要とする旨を示されるのである。

四

五

十声念佛 四七頁参照。

標榜『教行信証』の各巻の内題(表紙

にあるものを外題、本文の前にあるもの

を内題という)の前

に掲げられた文。『教文類』では『大経

が示され、行・信・

詮・真仏土・化身土

の各巻には、それぞ

れが成立する根拠と

しての願の名前が掲

げられている。

諸行の法 称名念佛

以外の行法。

## 第二節 第十七願と第十八願との関係

### 名号流行の誓

前節で述べた第十八願の法を私たちに説き示すことを誓われたのが第十七願で、これを諸仏・称・名の願と名づけられる。第十七願の文は、

設我得仏、十方世界、無量諸仏、不悉菩薩、稱我名者、不取正覺。

たとひわれ仏を得たらんに、十方世界の無量の諸仏、ことごとく菩薩として、わが名を称せずは、正覺を取らじ。(一八)

(もし、わたしが仏になるとき、十方世界の数かぎりない諸仏が、ことごとくわたしの名をほめたたえぬようなら、わたしは決してさとりを開きません)

というのである。ここでは、阿弥陀仏の名号を十方の諸仏が称揚讚嘆するということが誓われてある。私たちにとって、諸仏の讃嘆の具体的なすがたは、积尊によつて説かれた「大無量寿經」である。「教文類」には、「如